

生活科の授業が広がる絵本

——絵本を通して「気付き」の目を養う——

Teaching Living Environment Studies:
Using Picture Books to Cultivate Perceptiveness

児童学科 石井 光恵
Dept. of Child Studies Mitsue Ishii

抄 録 生活科の授業では、子どもたちの「気付き」の質を高めるとともに、科学的な見方・考え方の基礎を養うことが求められている。科学的な見方・考え方というと自然科学的なものを想起しがちであるが、本来はもっと幅広く自然科学、社会科学、人文科学的なもの見方・考え方がある。それらを統合するような形で、生活科では子どもの「気付き」を通して科学的な見方・考え方の基礎を養うことが求められる。生活科の授業では、具体的な活動や体験を通して学ぶことが基本である。具体的な活動の中で学ぶことから、さまざまなことに気づいていくことを目指していくが、そうした具体性の中で得られる実感としての気付きには貴重なものが多い。しかし、小学校1、2年生の子どもたちは経験も少なく、事象はさまざまな角度から見ることができるということに気付くには、困難があるだろう。そうしたことに、幼児期から馴染んでいる絵本を使用することは、有効なことではないだろうか。絵本は、子どもたちにさまざまな視点からものを見ることが可能なことを示唆できるよい教材となり得る。図鑑や教科に沿った資料での単なる調べ学習ではなく、絵本は物語る視点を持って子どもたちを楽しませながら、子どもたちにもその見方の幅広さを提供できる。本論考では、生活科の授業が広がる絵本について考察する。

キーワード：生活科、気付き、科学的な見方・考え方、絵本

Abstract Teachers of Living Environment Studies need to enhance the quality of children's "perception" and help build a foundation for seeing and thinking scientifically. When people hear the expression "seeing and thinking scientifically," they tend to think of the natural sciences. Fundamentally, however, this phrase refers more broadly to a way of seeing and thinking in the natural sciences, social sciences, and humanities. What is needed in Living Environment Studies is to build a foundation for seeing and thinking scientifically through the development of children's "perception" in a manner that unites all of these. Learning through concrete activities and experience is fundamental to Living Environment Studies instruction. One objective of such instruction is to help students perceive many things through the process of learning during concrete activities, but there is much value in the personal experience of perception gained in the concreteness of activities. However, children in the first and second grade of elementary school have little experience and it is difficult for them to perceive that phenomena can be looked at from various angles. Perhaps the use of picture books, which are familiar to students from infancy, is an effective way to encourage this perception. Picture books can be excellent teaching tools for suggesting to children that things can be seen from various perspectives. This is more than just research-based learning using reference materials like illustrated guides and textbooks. Rather, it is a way of presenting the breadth of viewpoints to children while entertaining them with a storytelling format.

Keywords: Living Environment Studies, perception,
"seeing and thinking scientifically," picture books

はじめに

生活科における「気付き」について言及する研究は比較的多い。

生活科が誕生した平成元年の学習指導要領、平成10年度の改訂、平成20年度の改訂を詳細に検討した松田らの研究¹でも、「今回の学習指導要領（平成20年度改訂：筆者注）においては、「気付き」の質を高める観点から活動や体験を一層充実するための活動を重視していること、児童を取り巻く環境の変化を考慮し、「安全教育に関する内容」と「自然の素晴らしさ、生命に尊さを実感する指導」等の充実を図っていること、更に地域の出来事等を「身近な人に伝え合う活動」を行い、「人と関わる楽しさ」が分かり進んで交流できるようにする旨の事項が新設されたこと等が明らかになった。「気付き」をめぐっては、「個別的な気付き」から「関連付けられた気付き」へ、そして「対象への気付き」から「自分自身への気付き」へとその質を高めるような学習活動を構想していることが明らかになった。」と報告しているように、生活科においては「気付き」ということについて上記のような点に重点を置き、その質を高めることにより一層の充実を求めている。

「気付きの質」の向上への言及は、生活科の一貫した主要テーマでもあり、このようなことから、生活科の研究も、授業と気付きの問題を考える研究を中心に、何らかの形でこの「気付きの質」について触れる研究、また質を高める試みの授業研究が主流となっている。それぞれの実践的な授業研究において成果が見られ²貴重であるが、中には子どもたちの気付きの表現としてオノマトペの活用に着目したユニークな研究³もある、しかしいずれも子どもたちの「気付きの視点」を養うことへの言及は薄いように思われる。

子どもたちは活動の中で、実体験を伴ってさまざまなことに気付いていき、教師の配慮によって気付きの自覚に至ることが多い。そのことは、生活科の授業にとって重要なことであるが、子どもたちが気付いていくときの視点の多様化も図られることが望ましいのではないかと考える。そこで、ものの見方、気付き方の視点の多様化を図るために、物事の顛末を客観的に捉えることができ、またさまざまな視点を提供してくれる絵本の活用を考えることはできないだろうか、というのがこの論考を編もうとする動

機である。

I. 授業に絵本を導入する試み

生活科の授業以外にも、絵本を授業に活用しようという研究はある。絵本を使った小学校の授業研究でよく見かけるのは、食育⁴や平和教育⁵、外国語教育⁶などでの展開である。また、絵本を小学校の授業で活用しようとの立場から、中川素子編集で文教大学絵本と教育を考える会著の『絵本でひろがる楽しい授業』（明治図書、2003）も出された。

中川はこの本で、絵本の定義年齢をせばめてしまうのはもったいないとし、絵本を学校教育の場で試みることを提唱する。また、「絵本の中には、教室でうるさく騒ぐいたずらな子、学校生活に不安をもつ子、友だちに思いやりをもつ子、勇気をふりしぼって問題を解決していく子など、いろいろな性格やいろいろな立場が描かれています。絵本を読むことから子どもたちは自分を振り返り、新しい力を得ていくのではないのでしょうか。」とも述べている。絵本が子どもたちの気付きに貢献する可能性を示唆している点が興味深い。

ちなみにこの本で、生活科の絵本としては、『はっけん・はっけん 大はっけん!』（アンヌ・マリ・シャプートン作、ジェラルド・フランカン絵、すえまつひみこ訳、偕成社）、『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』（長谷川義史作、BL出版）、『スイミー』（レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳、好学社）、『だんまりこおろぎ』（エリック・カール作、くどうなこ訳、偕成社）、『オタマジャクシをそだてよう』（ビビアン・フレンチ文、アリソン・パートレット絵、山口文生訳、評論社）、『はちうえは ぼくにまかせて』（ジーン・ジョン作、マーガレット・ブロイ・グレーム絵、もりひさし訳、ペンギン社）、『よくみてよくみて にむものランド』（ジョーン・スタイナー作、まえざわあきえ訳、徳間書店）、『あおむし けむし』（ヴィヴィアン・フレンチ文、シャーロット・ヴォウク絵、歌崎秀史訳、岩波書店）、『おふろほうや2 ぼくのおじいちゃん』（パム・コンラッド文、リチャード・エギエルスキー絵、セーラー出版）などがあがっている。発見学習に挑戦したり、自分のルーツ探しをしたり、動植物の飼育をしたり、とそれぞれにワークが提案され、子どもの活動を促している。例えば、幼稚園た

んぼぐみの5歳のほくが、自分のルーツ探しをする『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』の絵本。まず、自分のお父さんを訪ね、おじいさんを訪ね、ひいおじいさん、ひいひいおじいさんを訪ね、ご先祖さまにたどりつくと、そこにはおさるの家族がいて、といった具合だが、おじいさんにも、ひいおじいさんにもそれぞれの生きた時代の生活と文化が描かれ、面々と自分へつながってきた時間に気付くことができる。ワークでは「○家に帰って、おじいさんやおばあさんに、家の古いお話を聞いてきて、調べ学習をしてみましょう。○家にある古い写真などを持ってきて、みんなで見せっこしましょう。○自分の家の系図を作ってみましょう。」となっている。絵本は、具体的、体系的に時の流れを子どもたちに見せてくれ、そこで自分にも同じように流れてきた時間に気付くことになる。自分とは何者で、どこから来ているのか、おさるにまでさかのぼるのは冗談にしても、自分の命が脈々と繋がってきていることを知るようになる。絵本を読んで、面白かったと終わらせるのもよいが、こうして生活の授業と結びつくと、子どもの中に実感的な気付きを起こすことができる。

最近では、絵本を主体に活用したワークショップを紹介した『絵本学講座4 絵本ワークショップ』（朝倉書店、2014）も中川素子編で出している。美術教育と結びつく活動が多いようにも思えるが、子どもの活動と直に結びついたワークショップは、フィールドワークが根底にある生活科の授業と相性がよいように思われる。例えば、『ふゆめがっしょうだん』（富成忠夫・茂木透写真、長新太文、福音館書店、1986）による「自然の不思議を絵本にしよう」や、『ガオ』（田島征三作、福音館書店、2001）を使った「木の実をあつめて夢の世界を作ろう！」などは、そのまま生活科の授業で行われている感があるワークショップである。

これら2冊の絵本のワークショップでは、いずれでもたっぷり自然を満喫しその先に様々な発見をしつつ、ワークショップの作業をすることになっている。絵本は、要は気付きのモデルであり、気付きの視点を見せてくれるものである。事象を客観的になって、見返る、振り返ることが可能であり、そこに絵本で授業を広げる意義もあるだろう。

また、絵本は、よく授業の「導入」という形で使われることがある。たとえば、「アサガオさんと

もだち」と題した上越市立高志小学校の1年生担任だった寺島恭平教諭の実践⁷にもそれは見られる。ねらいを「アサガオの継続的な栽培活動を通して、アサガオの生長の変化に気付くとともに自分自身の成長の変化にも気付く」とした生活科の授業で、この一連の授業のはじめに『いのちのアサガオ』（国語）を読み聞かせるとある。授業展開としては、「『いのちのアサガオ』の読み聞かせは、子どもたちにアサガオ栽培の動機付けを生み出すための仕掛けである。自校にもその種があることを知り、子どもたちは驚くとともにアサガオを育てる気になった。」と説明が加えられていた。作者、出版社の詳細が明記されていないので、特定はできないがもし『いのちのあさがお—コウスケくんのおくりもの』（綾野まさる作、松本恭子画、ハート出版、1997）か、それを絵本化した『えほん いのちのあさがお』（2001）であれば、それは7歳で白血病のため逝ったコウスケくんのアサガオの種の話で、感動的な話である。現在、コウスケくんの「いのちのあさがお」は骨ずいバンクを広める運動とともに全国へ広がろうとしているという。学びの動機付けに絵本を使用するという場合も、あってもよいだろう。しかし、そうした利用から一歩進めて、幼児期から親しんできた絵本で、幼児期とはまた違ったものを知る、見る、考えるときの視点を獲得するという方向から、絵本を授業で活用していくという道筋があってもよいように思われる。

そうした意味で、つまり気付きの目を養うロールモデルとしての絵本として、生活科の授業が広がる絵本を考えてみたいと思う。

Ⅱ. 生活科の教科書と絵本

生活科の教科書は、いずれの出版社の教科書かを問わず一律に写真やイラストが多用され、教科書そのものが写真絵本のように見えなくもない。それは生活科という教科が、「子ども（児童）の身近な生活圏（生活している範囲）を学習の対象や場として、子ども（児童）が具体的な活動や体験を通して学び、「自立への基礎を養う」ことを目標とした教科」であることによっている。生活科が目指す教科目標は、①具体的な活動や経験を通して、②自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、③自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、④生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、⑤自立

への基礎を養うという5つのポイントに分けて考えられるが、このことを、生活科の学びの基本である子どもが具体的な活動や経験を通して学ぶというその具体性の実現化とともに、視覚的な教科書でも子どもたちによりリアルさを届けるため、現実を写し取った写真の表現を多様することになるのだろう。具体性を写真に求める志向は、子どもたちの学びの活動を、現実の活動と違和感のないものにするという表れとも解釈できる。具体的なイメージによる視覚的な把握を、小学校1,2年生の子ども達の発達特性として理解しているからであろう。生活科の教科書は、他教科に比べ、お子様ランチのように賑やかで実に楽しい。しかし、現実が教科書のように賑やかでなんでもなく、教科書の写真は、切り取られた部分的な現実でしかないのだが、しかし印象づくという効果は期待できるかもしれない。

生活科の授業は、いいかえればフィールドワークの要素が強いということである。そして、また、子ども達の発達特性を考える上で、幼小連携の科目としての働きが強調される授業でもある。例えば、スタートカリキュラムの学校探検などは、その好例の授業といえるだろう。

学校探検の絵本を考える

『いちねんせいのがっこうたんけん』（おかしゅうぞう作、ふじたひお絵、佼成出版社、2008）という絵本がある。子どもたちが学校探検を理解するのに、よいテキストとなるような絵本である。学校探検とはいかなるものであり、どのように展開されるか懇切丁寧に説明されている。そうした理解を子どもに促すという目的がそこにあるからだろう。文章も悪くない、もちろん絵も悪くない。しかし、子どもに本当の意味で気付きを起こさせるのは、そうした説明の絵本でない、というのがこの論考の骨子となる。

『1ねん1くみの1にち』（川島敏生写真・文、アリス館、2010）という写真絵本がある。この絵本は、学校探検を謳ってはいないが、まさに学校ってどんな所かなということを目の当たりに見せてくれている。扉の写真は子どもと正面を向き合う、つまり出会うという形のものになっているが、他の写真はそのほとんどが、読者が俯瞰する視点で撮られたものを配していく（図1）。つまり、絵本の前に座ってページをめくるとに神の目のように見渡せ

ることになる。この視点は、子どもの実際の活動では、決して得られない視点になっている。ここが重要で、自分では決して見ることでできない地点から、自分が行動するであろう世界を確認することになる。ここに、子どもたちの気付きの目を養う力が潜んでいる。全体を見渡して理解する学校と、自分たちが実際に歩いて理解する学校の、イメージーションによる結びつきが出現する。自分で体感する現実の認識は、十分に重要なことであるが、人間には物理的な限界があり、そこをイメージーションを駆使することで埋めあわせるのが、また人間というものである。その現実体験だけでは得られない、イメージーションの元になるものを、絵本は提供できることに、存在意義がある。授業に絵本を使っていく意味も生まれてくるだろう。



図1 『1ねん1くみの1にち』

もうひとつのこの絵本の気付きへの利点は、写真としてはそれなりに大判だが、そこに映る被写体と挿入される文字が小さいことである。子どもたちの発言が吹き出しでつけられるそれぞれのことばは、教員がみんなの前で導入として読み聞かせるには、あまり小さく見えにくいことにある。だから、これは授業に使えるのではなく、だからこそ授業に使える絵本なのである。それぞれが、手にとってじっくり見ることで、それぞれの気付きが生まれてくるように、この絵本は作られている。気付きとは、あくまで個人的なものである。対象としっかり向かい合う中でこそ生まれるものであるに違いない。

こうした絵本を本格的に、授業で生かしていくためには、それなりの工夫が必要となるだろう。日々の生活の中で、絵本が自然と手に取れる環境が必要となるのは、いうまでもない。学級文庫の整備、また絵本の提示の工夫は、必須のものとなるだろう。

『自然科学的視点での気付き』の転換を絵本で考える

子どもたちを取りまく自然への気付きを促すといえ、すぐに正確でリアルな図鑑を思い浮かべよう。調べ学習にはもってこいという向きもあるだろう。かなり有効な図書資料であることは間違いない。しかし、まだ現実のものの中から、切り取って見ることに十分な経験を持たない幼い子どもたちには、即図鑑の使用はどうだろうか。

まずは、自然の中で起こっている驚異に目が開かれるところから始めなければならないだろう。全てが見えていることは、何も見えていないことと同義の場合が少なくない。生活科で考える、幼い子どもと自然の出会い、ある程度抽出されているものの方が有効に思われる、したがって、本物が移っているのだから間違いないだろうということで、低学年の子どもたちに写真が多用される絵本はどうだろうか。

物語があって、登場人物に感情移入しやすく、そのものの特徴が多少強調されて目にできるというものの方が、ものを知り気付きを引き出すのには有効のように思われる。生き物に関心を寄せる人間の想像力は、共感がベースになるように思われる。スーパーで買った豚肉は食べられるが、自分の育てた豚を食べるのは忍びないという感情と似ているかもしれない。

例えば『げっ歯類のこと』（キャスリン・シル文、ジョン・シル絵、小金沢頼子訳、玉川大学出版部、2012）などである。げっ歯類とはいかにもいかめしい名前だが、ヤマアラシ、リス、ビーバーといった特別な前歯を持っている小動物たちである。シンプルな解説文と、細かいところまで正確に描写された細密画風の絵でできている絵本である。細密画なので、いかにも本物というリアリティがあるものの、現実のものではない。そこは、見やすいように筆が



図2 『げっ歯類のこと』

振るわれているのである。しかし、写真以上にリアルに目に映る。日本の作家でいえば、藪内正幸が描く鳥や動物の絵本群も同じ意味

を持つだろう。見るべきものを見えるように再現して見せる、それも絵本であろう。

また、写真絵本の『アリからみると』（桑原隆一文、栗林慧写真、福音館書店、2004、初出 2001「かがくのとも」）は、また違った視点を子どもに見せてくれる。『アリからみると』が書名なのに、表紙にはアリがおらずショウリョウバッタがデンと姿を見えている。「なに、この怪物のような虫は？」と思うのだが、これはいうまでもなく、このショウリョウバッタを見ているのは、アリの目なのである。アリからは、あの小さなバッタさえこうみえるという視点を、読者に提示している。人間には味わえない見え方である。あの小さなアリになれる訳もないので、本当にアリからはこう見えているのか、真実の程は分からないが、いかにもというリアリティがあ



図3 『アリからみると』

る。人間以外の視点を持つと、世界は大きく変わって見えていくのである。そのことに気付くのも、こうした現実には自分では見ることのかなわない視点を提供してくれる絵本だからこそのことである。

違う自分を体験するイマジネーション。これは、人間のみが持ち得るイマジネーションに違いない。視点を変えると共有する空間にいても、全く違う世界が展開するというに気づかせてくれる絵本がある。片山健が描いた『ぼくからみると』（高木仁三郎作、のら書房、2014、初出 1983「かがくのとも」福音館書店）である。夏のある日のひょうたん池の昼過ぎ。そこではさまざまなドラマが展開している。自転車で疾走してくるしょうちゃんから見



図4 『ぼくからみると』

える光景、つりをしてるよくんから見える光景、池の中の魚が見たら、かいつぶりのお母さんが見たら、空から舞い降りるとんぴから見ると、巣に駆け戻るかやねずみのお父さんから見ると……、とそこに共生するもの

たちはそれぞれ違った世界を見ることになる。いかに多様な視点が存在するか。どの視点に自分がいるかで、世界はこれほど違って見えるものなのかを実感する絵本となっている。

写真の絵本ではない、油彩によって描かれた絵画の世界である。しかし、視点を変えると違うのがみえてくる、このことはそう提案されて初めて見えてくることに違いない。「気付く」に難しいことであるが、絵本からの問いかけがあれば、容易に気付くことができる。絵本によって新たな世界が見えてくるのである。

「社会科学的視点での気付き」を促してくれる絵本

生活科は、幼い子どもたちに理科的視点と社会科的視点から、事象を理解できるよう求めてできた教科でもある。社会、そこに暮らす人々と自分の関係をどうとれるか、といったところがポイントであろう。ここでは、地図的視点について目を開かせてくれる絵本を取り上げたい。

地図は、現実の三次元空間を、平面の二次元空間で把握する、また二次元空間に描かれたものから、三次元空間を探し当てるといった人間の想像力に働きかけるものである。広大な三次元空間を、小さな紙片に閉じ込めることができる。地図という、生活科では町探検の単元がすぐに念頭に浮かぶが、そればかりが地図ではなく、関係図そのものが地図であると提言する絵本がある。

サラ・ファネリの『ちずのえほん』（ほむらひろし訳、フレーベル館、1996、原書1995）である。お宝の地図はもとより、こどもべやのちず、かぞくのちず、いちにちのちず、おなかのちず、こころのちず（図6）…、いぬのちずまである。地図とは、自分との関係性において、その関係性を明確にするために描くもの。つまり、認識とそれをどう把握し

たかの図なのだというのである。誰もがみな共通して読めるものが地図という認識に陥りやすいが、本来は個人的なものなのかもしれないと思えてくる。



図5 『ちずのえほん』

このように、柔軟な思考を読者に求めて迫ってくるものも、絵本なのである。

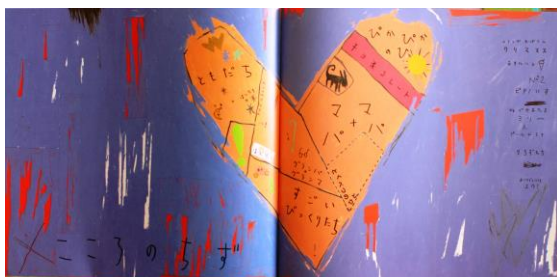


図6 『ちずのえほん』（こころのちず）

『せかいのひとびと』（ピーター・スピアー絵・文、松川真弓訳、評論社、1982、原書1980）は、地球規模で世界を見せてくれる。インターネットが発達し、瞬時に情報が世界をめぐる、あらゆるところの映像がテレビやパソコン、スマホに流れる現代。しかし、すでに前時代的なメディアになったと思われる絵本に確認できる世界は、はるかに雄大で強い絆を感じさせる世界になっている。二次元の平面の本の中に閉じ込められた世界は、人間の想像力の翼を駆って大きく飛翔する。近年日本でも、外国にルーツを持つ子どもたち（両親、あるいは両親のどちらかが外国籍の子ども、日本籍の子どもを含む）をよく目にするようになってきた。学校の教室の中にも、何人もいることだろう。島国日本の第二の開国とも呼べる現象を、我々は日々ひしひしと感じている。世界の人口は増え続け、およそ70億人いるという。70億の人々が、言語も文化も、思想も宗教も…とさまざまに違って、この地球上で暮らしている。インターネットの普及もあって、世界がすぐに情報でつながるグローバル化の時代、その中

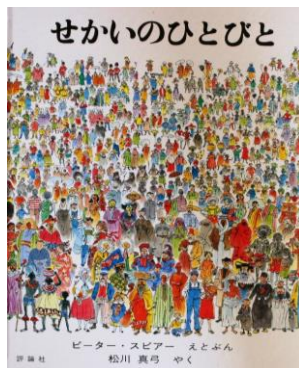


図7 『せかいのひとびと』

で育つ子どもたちには真の国際感覚が求められてくる。そうしたことに、ゆっくり実感を持って気付かせてくれるのが絵本なのである。ものすごい速さで動く日々の時間の流れの中であって、自分のペースで情報を確認できるのも絵本とい

うメディアである。

「自分への気付き」を一貫して求め続けてきた絵本

自然科学的な視点での気付き、つまり理科的な気付きと社会を背景とした気付き、つまり社会科的な気付きと進めば、最後は「自分自身への気付き」ということになるだろう。ある意味絵本は、その自分自身への気付きを読者に一貫して求めてきたものであるといえるかもしれない。

登場人物に感情移入を果たすことで、他人の物語を生き、他人の心のありようを理解するというようなことを幼いころから、絵本を通してやってきたように思う子どもたちも、再び生活科という活動を主体とする学びの中で、気付きを追い求めながら、また学びなおしていく。最終的には、自分を取りまく世界とのかかわりで自分自身に気付いていくことを、求めるという。

『わたし』（谷川俊太郎文、長新太絵、福音館書店、1976）は、「わたし」という存在を、自分を取り巻く人々との関係で捉え直していく。「わたし」は「おとこのこからみると おんなのこ」、「おにいちゃんからみると いもうと」、「あかちゃんからみると おねえちゃん」と立場によって、「わたし」の存在もおおのずと違ってくるとのことへの



図8 『わたし』

認識。「わたし」は、どこまでいっても「わたし」であるはずなのだが、私は関係の上に成り立っていて、全く違う「わたし」の把握もあり得ることになる。自己存在にかかわって、絵本を読む読者自身に投げかけられる問いが、

絵本の中から聞こえてくる。あなたは何者なのか、私は何者なのかと。

はいじまのぶひこの『きこえる?』（福音館書店2012）も、作中から問いが発せられる。絵本『きこえる?』の問いは至ってシンプルで、「きこえる?」というテキストとともに、画面の絵から「はっぱのゆれるおと」、「はなのひらくおと」「ほしのひかるおと」…「きみのなまえをよぶこえ」など微妙な音たちを、心で聞かせていこうとするものである。絵本の絵は、すべてシルエットで構成され



図9 『きこえる?』

問われる「私」が象徴されていく。大いなるもの、言い換えれば自然の音に耳を傾けることで、生きている自分の存在を確かめていく。そして最後には、「きみのなまえをよぶこえ」が聞こえるかと問われる。名前を呼ぶ声は大いなるものの声であり、自分を愛し共に生きるものの声である。ここで発せられた問いはエンドレスに繰り返され、読者もまた自分自身への気付きを求めてエンドレスにその答えを探していく。

『ぼくのニセモノをつくるには』（ヨシタケシンスケ作、ブロンズ新社、2014）では…。やりたくないことをやらせるために、自分のニセモノロボをつくることにしたけんたくん。ホンモノそっくりになることをめざすロボは、けんたのことをあれこれ知りたがる。ニセモノの自分を作るには、ホンモノの自分を教えてやらなければならないということになる。自分を知って、人に伝えるのは本当に面倒なこと。でも、真剣にやっているときまざまな新たな



図10 『ぼくのニセモノをつくるには』

問いがうまれ、本当の自分を知っていくっておもしろい!ということになる。けんたくんらしさを教えるようにロボに言われ、改めてぼくらしさって?と考え始めるけんたくん。自分とは何かの問いと、自分探しの末の気付きと。これらは永遠に問われ

ていて、余分なものが極限まで省かれ、かすかに聞こえる音に耳を傾けて行く。絵本の見返しは満点の星空で、広大な宇宙空間に存在する小さな生命としての

続けるテーマなのかかもしれない。生活科の教科書のおもしろな説明には探せない問いが、絵本にはある。

おわりに

長編アニメーションで、商業的な成功と世界的な評価を得てきた宮崎駿監督が引退表明で残したことは、子どもの教育と未来を考える者たちに限らず、今を生きる我々にとって実に示唆に富むものだった。それは、自分たちのアニメーション映画作りの根幹を支え、子どもたちに伝えたかったのは「この世は生きるに値する」という思い。それは今でも変わっていない」というものだった。いつも希望を失わない「この世は生きるに値する」ということばは、印象的だった。21世紀をむかえた我々の世界。それは、「この世は生きるに値する」と常に信じられるものとはいい難いに違いない。それでも、「この世は生きるに値する」と子どもたちに手渡していこうとする思いは、心に響いて潔い。現代は、我々が日々目にし、手で触れて確かめながら生きる世界とはかけ離れたところで、情報化が猛スピードで進展する世界となっている。インターネットやパーソナルコンピュータなみの機能を持たせたスマートフォン（スマホ）などの急速な普及によって、我々の生活や行動形態が、従来と一変するのは目に見えて明らかで、それはもう秒読みの段階かもしれない。情報は人間が操作することで、生活をよりよいものにしていくのが本来の目的だが、情報に人間が操作される怖さを抱え持つ、不安な世界を演出する。

佐藤学は、「知識が情報として氾濫し言葉が記号として浮遊する社会において、私たちは、どのような言葉の経験を教育において求めればいいのか」⁸と問うたことがある。そして、「言葉は、関わりの中で生み出され、その関わりを表現している。その意味で言葉は「経験」であり「絆」である。このことを前提とするならば、言葉の教育は、「モノ」や「こと」や「人」に対する無関心という、現代に生きる私たちの根源的な病に立ち向かう教育といってもよいかもしれない」⁹と答えをだした。

子どもが「この世は生きるに値する」と実感し、「モノ」や「こと」や「人」に対する無関心を克服して新たな出会いに果敢に立ち向かう力を養う教育は、生活科という教科の中にも脈々と生き続けているように思われる。その生活科の授業が広がる絵本について言及していくことは、意味のないことではないだろう。子どもたちにより質の高い「気付き」を経験させたい、「気付き」の質を少しでも高めていか

せたいと思うならば、その気付きへの目を養う環境に目を向けるのは、ある意味当然のことかもしれない。

<注>

- 1 松田典子・生野金三：生活科の研究～生活科誕生と学習指導要領の変遷～、実践女子大学生活科学部紀要、49、181、2012
- 2 石井光恵他による、「「生活」の授業にパネルシアターを導入する試み」の連続した研究（日本女子大学家政学部紀要、第56号、57号、60号に掲載）などでも、生活科の授業における「気付き」の問題を扱っており、その成果について触れている。
- 3 池田仁人：生活科学学習における科学的気付きの表現に関する研究、子ども教育研究、子ども教育学会紀要、4、101-106、2012
この研究では、研究目的を「生活科学学習の中で為される科学的な思考や気付きが、特徴的な言語要素を用い表現されていることを、実際の学びの場の表れから検証する。オノマトペ等の言語が、児童が為す気付きや思考そのもののサインとなる表れであることを活動中の実際の姿からも読み取り、どのような使われ方をしているかを明らかにしていく。そして、「知的な気付き」の見取りを確実なものとするための知見を得る。」としながら、結論としては①「子どもたちの気付きや考え、知識などを表現する際にはオノマトペや「たとえ」等が活用されている」、②「一般に認知されていないオノマトペをその場にいた子どもたちが考え、表現の手だてとして用いる場面も見受けられた」、③「言語要素の他には身振り手振りといった身体表現も重要な手だてであることが確認された。」としている。
- 4 例えば、城戸杏奈他による「小学2年生に対する絵本を用いた食育の有効性：一食知識と食態度に着目して」（栄養学雑誌 70（4）、236-243、2012）などで、「絵本を用いた食育により公立小と附属小の介入群の児童は、前者では食知識と食べる意欲および感謝の心の項目に、後者では食知識と食べる意欲および食意識の項目において、いくつかの望ましい変化が認められた」という報告がなされている。
- 5 例えば、齊藤由佳他による「絵本を用いた平和

学習—小学校における指導を考える—」(年会論文集(28), 66-69, 2012, 日本教育情報学会), で, 「平和学習の教材のひとつとして絵本を用いることの意義について触れ, 学習場面で使うことができる絵本について考察」し, インターネット上に「絵本データベース」としてまとめたものなどがある。

- ⁶ 例えば, 又野陽子による「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動におけ英語の絵本の活用方法:—絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*を教材として」(中国地区英語教育学会研究紀要(43), 41-50, 2013)などで, 又野によれば「絵本は絵を見れば内容が想像できるものが多く, 文章も比較的少ないので児童の実態に応じ, 多様に活用できる教材である」と紹介されているということで, 又野も「絵本は身近で

覚えやすい文脈(context)の中で言語や文化的な情報を導入し, 適正なインプットを与えることができるので, 外国語学習への入門として有用なものであり, 絵本の内容に関連した多様な言語やアクティビティーへと発展する足がかりや出発点ともなりえる。」という認識を持っている。小学校外国語活動において絵本を題材とした実践ではこれまで多くの提案がなされているとも, 又野は報告している。

- ⁷ 木村吉彦:生活科の理論と実践—「生きる力」をはぐくむ教育のあり方—, 日本文教出版, 2012

この事例は, p189-191で紹介される。

- ^{8,9} 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編:言葉という絆, 東京大学出版会, 1995, p263-264